



Title	Shit in the Works of James Joyce : The Representation of the Inexpressible within the Waste Images in Finnegans Wake
Author(s)	宮原, 駿
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81966
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (宮原駿)	
論文題名	Shit in the Works of James Joyce: The Representation of the Inexpressible within the Waste Images in <i>Finnegans Wake</i> (ジェイムズ・ジョイス作品における排泄物：『フィネガンズ・ウェイク』における排泄物イメージにみる表現し得ないものの表象)
<p>排泄物のような汚いモチーフがモダニズム文学に見られることはほとんどなく、そのためその排泄物イメージに関する研究の数は希少である。しかし、ジェイムズ・ジョイスの作品群には排泄物のイメージが頻繁に用いられている。特に『フィネガンズ・ウェイク』（以下『ウェイク』とする）には糞便的な挿話が多く含まれている。例えば、主人公 HCE は排尿する女性たちに猥亵行為を働き、彼の妻 ALP も魅惑的な娼婦として挑発的に排尿する。また、双子の息子の一人シェムは自分の身体に糞便を塗ることで芸術作品を作り出す。その他、排泄物を体現する造語である100文字語や歴史的人物が戦場で排泄するエピソード、肥やしの山に埋もれた手紙などが挙げられる。本論文では『ウェイク』におけるこうしたモチーフを心理的、また、社会・文化的な要素との関係において探求する。</p>	
<p>批評的背景</p> <p>従来、汚穢のイメージは主体の構築や社会と文化の構造に結びつけられてきた。多くの批評家たちが主体のアイデンティティと汚穢との密接な関係を主張してきた。アイデンティティの構築に関して、人間は「自分ではない」と思う対象に他者性を付与することで自己の境界線を画定するとされる。他方、社会や文化の構造に関して、汚穢は適切な社会・文化的な構造を維持するために排除されるべきものとして定義される。つまり、排泄物に代表されるような汚穢は、人間の心理や身体との関係においてだけでなく、社会や文化との関係においても議論されるのである。本論文では、汚穢のイメージにおけるこうした二重の象徴的意味作用に基づき、『ウェイク』における排泄物のイメージをその心理的、また、社会・文化的関係において検討する。</p> <p>ほとんどの先行研究は、ジョイス作品における排泄物イメージがスカトロジー文学の諷刺的な伝統から出発し、新しい用法を探求して変遷してきた事実を等閑視してきた。従って、再度ジョイス作品における排泄物イメージを通時に検討することが必要である。また、『ウェイク』における排泄物イメージに関する包括的研究もあまり見られない。先行研究は、糞便学的芸術家シェムや雌鶲ビディが啄む肥やしの山に焦点を当てるのみで、その他の排泄物イメージには目を向かない。繰り返し現れる女性の排尿のモチーフが批評家の関心を引くこともほとんどなく、排泄物そのものを体現する100文字語という特異な造語については先行研究すらほとんどない。このような批評的背景を鑑みて、博士論文では、まずジョイス作品における排泄物イメージの系譜を精査し、次いで『ウェイク』における排泄物イメージの特異性を分析する。</p>	
<p>本論文の目的と構成</p> <p>本論文における主張は二重構造になっている。第一に、ジョイス作品における排泄物イメージの系譜の分析において、作家の排泄物イメージの用法がスカトロジー文学の諷刺的伝統に端を発したものの、修辞的な実験段階を経て、排泄物イメージを心理的、かつ、社会・文化的要素と結びつける新しい手法に到達した、と主張する。第二に、次のように主張する。『ウェイク』においてジョイスは排泄物イメージによって多様な心理的、かつ、社会・文化的な抑圧状況をその修辞法を解体、混淆、昇華しながら表現した、と。つまり、排泄物イメージは物語の支配的規範によって抑圧されているために表現できなくなっている心理的・社会文化的現象を表象するのである。</p> <p>第1章では、ジョイス作品における排泄物イメージの用法の変遷を概観する。排泄物イメージの初期の用法は風刺詩「ザ・ホーリー・オフィス」や短篇集『ダブリナーズ』に見受けられる。例えば、「土くれ」では、二人の少女の堕落した性質が、諸聖人の祝日前夜のゲームの中で二人が企んだ擬似・排泄物による悪戯を通じて諷刺的に描かれる。しかし、ジョイスは排泄物イメージの諷刺的用法から徐々に離れ始め、新しい意味作用の可能性について実験するようになる。「死者たち」の排泄物イメージは風刺的文彩として現れることはなく、攪乱的で危険な性質と肯定的で生命感溢れる性質を同時に有する両義的なモチーフとなる。また、『若い芸術家の肖像』の排泄物イメージはスティーヴンの悩める意識において罪を象徴する。最後に、作家は『ユリシーズ』や『ウェイク』において排泄物イメージの身体性に注目しながら、それを心理的状況と関連付けるようになっていく。ブルームの排泄行為は様々な肥沃さと結</p>	

びつけられ、彼は排泄物の潜在性について思索する。身体感覚は精神活動に結びつけられ、ブルームの蠕動運動は彼の心理状態に対応する。そして、便秘による身体感覚に促されて、彼は排泄物の利用可能性について考えることになるのである。また、『ウェイク』では、例えばシェムの排泄物からできたインクは彼の負の人生を表象する。このインクで自らの身体に描くことで、彼は人生を受容するだけでなく、文化的主流から逸脱した新しい形式の芸術を作り出すのである。

排泄物イメージを包括的に探究するために、第2章から第5章の議論はミクロからマクロへと展開する。つまり、言語レベルから始まり、登場人物の人生、社会文化的な視点、最後にメタ物語的な次元へと至るのである。第2章では、「領主ヴァン・フーサーとプランクィーン」の挿話における100文字語を扱い、抑圧されたものが回帰するメカニズムを描き出す。100文字語は作中に10回現れ、それぞれが異なる意味を持ちつつ、100文字のアルファベットから成るという点においてその形式が類似する。この類似によって、ある100文字語の意味は別の100文字語へと物語空間を越境して鳴り響く。「領主ヴァン・フーサー」の挿話における100文字語は領主の排泄物を表象し、それは彼の中産階級家庭へのプランクィーンの侵入を告げる。母／娼婦というプランクィーンの二重のアイデンティティは領主一家が維持してきた支配的な文化規範を攪乱する。この状況の突然の変化は物語に境界線を作り出すという100文字語の性質によって説明され、この性質は6番目の100文字語における「戸を閉める」という意味が共鳴する点に窺われる。実際、100文字語が現れた後には、物語形式が変質するだけでなく、プランクィーンも含めた領主の一家が幸せな雰囲気の中で船出する。100文字語に表現される抑圧されたものの回帰が再生的な力をも秘めていることを暗示するのである。

第3章では芸術家シェムの心理に分け入っていく。シェムは自らの身体に自分の排泄物から生成したインクを塗る。このインクに物質的な要素と抽象的な要素が共存していることは注目に値する。というのも、このインクは排泄物からできていると同時に、「知力の残りかす」とも呼称されるからである。彼の人生における負の側面は排泄物に対応し、彼は物質化した人生としてのインクで自らの身体に描くことによって負の人生を受容しようとする。これは主体的な人生受容というだけでなく、人生を芸術へ昇華することを通じて他者の承認を希求する行為でもある。彼の双子の兄弟ショーンは彼を非難し、彼の人生と芸術を批判する。彼の語りにおいてシェムは認容し難い排泄物のようなものにすぎないのである。しかし、物語はシェムを包含することで変容を遂げる。ショーンの非難が最高潮に達した時、彼らの母 ALP が希望に満ちた雰囲気で現れる。彼女はシェムの価値を認め、兄弟間の争いを調停する。彼女の登場はシェムの人生と芸術を認めて、物語に排泄物を受容させるのである。シェムが「生杖」を掲げると「物言わぬもの」が新しい表現を発して、物語の変容が達成される。同時に、無言であったシェムも母の承認とともに叫び始めることになる。

第4章では、挿話「如何にしてバックリーはロシア将軍を撃ったのか」を考察する。ここでは、表層の歴史的・文化的現実が深層の個人的現実を抑圧するという構図が窺われる。クリミア戦争において、バックリーはアイルランド人兵卒であり、ロシア将軍を狙撃しようと試みる。将軍が排泄しているのを発見して狙撃を控えるものの、彼が芝土で尻を拭うと射殺してしまう。クリミア戦争は騎士道精神と十字軍という考えが未だ機能していた最後の戦争であり、騎士道精神によって無防備な将軍を撃つことを思い止まり、次いで将軍の行為をアイルランドへの侮辱と捉えたバックリーの狙撃は愛国心によって正当化されているように見える。また、バックリーとロシア将軍は文化的価値観において対立関係にある。将軍が尻を拭う行為は排泄物を排除することで発展してきたと言われる現代文明の価値観を踏襲するものの、シェムと同一化されるバックリーは排泄物の文化的意義を評価する。しかし、このような歴史的・文化的語りはバックリー個人を不可視化する。彼は将軍が娼婦たちと戯れているところを目撃し、将軍に対して嫉妬と同性愛的な欲望を抱く。彼の感情は最後の狙撃に繋がるが、歴史や文化という大きな物語によって巧妙に隠蔽される。

第5章では、様々な汚穢の流れと、『ウェイク』という物語を夢に見ている「夢見人」の罪の意識との間の関係を考察する。夢見人の意識は人生における罪と対峙しようと苦闘している。この夢の物語には、ファニー・ユリニアという女性が登場し、彼女はワイン／尿という液体をパブの客たちに供する。こうした排泄物イメージの両義性は、文化的良識が侵犯されつつも、同時に維持されているようにもみえる状況を提示する。次に、排尿する女性が繰り返し登場し、HCE の罪の原因が仄めかされる。彼は厳しく非難されているが、彼女たちが排尿によって彼を性的に唆したという疑いも浮上する。一方で、リフィー川の汚水は生命を与えるような性質を持つ。洗濯女たちは HCE の罪を表象する汚い水を浴びることで、木と石に生まれ変わり、人間的苦しみから解放される。これらの汚水は攪乱的、かつ、生命を与えるような両義性を示す。最後に、罪に対する夢見人の態度は ALP の独白に体現されるリフィー川において明かされる。彼女は夫 HCE の人生における過ちを許し、未来への希望を表明する。川の汚水に表象される罪は夢見人の苦悩の原因であるばかりでなく、それを受け入れることで救済ともなりうるものである。しかし、通常の目覚めた意識の中では倫理規範に検閲されるため、夢見人はこの問題と向き合うことができない。汚穢の流れは HCE の罪に託して彼の罪を表象することで、夢見人が人生における抑圧された問題を受け入れることを助けているのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (宮原駿)		氏名
論文審査担当者	主査	大阪大学 教授 山田 雄三
	副査	大阪大学 教授 服部 典之
	副査	大阪大学 教授 片渕 悅久
	副査	大阪大学 教授 石割 隆喜
	副査	大阪大学 准教授 森本 道孝
	副査	大阪大学 外国人教師 Harvey, Paul

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目 Shit in the Works of James Joyce:

The Representation of the Inexpressible within the Waste Images in *Finnegans Wake*

学位申請者 宮原 駿

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	山田 雄三
副査	大阪大学教授	服部 典之
副査	大阪大学教授	片渕 悅久
副査	大阪大学教授	石割 隆喜
副査	大阪大学准教授	森本 道孝
副査	大阪大学外国人教師	Harvey, Paul

【論文内容の要旨】

排せつ物のモチーフがモダニズム文学に見られることはほとんどなく、そのため排せつ物イメージに関する研究の数は希少である。しかし、James Joyce の作品群には排せつ物のイメージが頻繁に用いられている。特に *Finnegans Wake* (1939) には糞便的な挿話が多く含まれている。例えば、主人公 HCE は排尿する女性たちに猥褻行為を働き、彼の妻 ALP も魅惑的な娼婦として挑発的に排尿する。また、双子の息子の一人シェムは自分の身体に糞便を塗ることで芸術作品を作り出す。その他、排せつ物を体現する造語である百文字語や歴史的人物が戦場で排せつするエピソード、肥やしの山に埋もれた手紙などが挙げられる。本論文では *Finnegans Wake* におけるこうしたモチーフを心理的、また、社会・文化的な観点から探求している。

従来、汚穢のイメージは主体の構築や社会と文化の構造に結びつけられてきた。多くの批評家たちはアイデンティティと汚穢との密接な関係を主張してきた。アイデンティティの構築に関して、個人は「自分ではない」と思う対象に他者性を付与することで自己の境界線を画定するとされる。他方、社会や文化の構造に関して、汚穢は適切な社会・文化的な構造を維持するために排除されるべきものとして定義される。つまり、排せつ物に代表されるような汚穢は、人間の心理や身体との関係においてだけでなく、社会や文化との関係においても議論すべき事がらである。本論文では、汚穢のイメージにこうした二重の象徴的意味作用が働いていると着想している。その上で、*Finnegans Wake* における排せつ物のイメージを分析することを通して、1930 年代におけるダブリン社会の抑圧とそこからの解放という小説全体のモチーフを浮き彫りにすることを目指している。

以下、本論文の目的と各論の概要を述べる。ほとんどの先行研究は、Joyce 作品における排せつ物イメージがスカトロジー文学の諷刺的な伝統から出発し、新しい用法を探求して変遷してきたプロセスを等閑視してきた。したがって、Joyce 作品における排せつ物イメージを通時に検討することが必要である。また、*Finnegans Wake* における排せつ物イメージに関する包括的研究もあまり見られない。先行研究は、糞便学的芸術家シェムや雌鷄

ビディがついばむ肥やしの山に焦点を当てるのみで、その他の排せつ物イメージには目を向けていない。繰り返し現れる女性の排尿のモチーフが批評家の関心を引くこともほとんどなく、排せつ物そのものを体現する百文字語という特異な造語については先行研究すらほとんどない。このような批評的背景を鑑みて、本論文では、まず Joyce 作品における排せつ物イメージの系譜を明らかにし、ついで *Finnegans Wake* における排せつ物イメージの特異な働きを分析している。

本論文におけるおもな主張はふたつある。第 1 に、Joyce 作品における排せつ物イメージの系譜を解明するにあたり、作家の排せつ物イメージの用法がスカトロジー文学の諷刺的伝統に端を発したもの、修辞的な実験段階を経て、排せつ物イメージを心理的、かつ、社会・文化的要素—例えば、身体の思考、排せつ物による罪の表象、排せつ物の潜在的創造性など—と結びつける新しい手法に到達した点である。これが第 1 章の概要である。第 2 点。*Finnegans Wake* において Joyce は排せつ物イメージを用いることで、多様な心理的、かつ、社会・文化的な抑圧状況—例えば、押し殺された罪の意識、文化的に抑圧された感情、支配的な文学思潮から逸脱した文化形式など—からの解放を目指したという点である。それが第 2 章から第 5 章までの概要である。

より具体的には、第 2 章で排せつ行為を模した百文字語を取り上げ、この奇怪な造語が用いられることで、抑圧されたものが回帰すると説く。第 3 章では、みずからの排せつ物をインクとして創作活動を行う登場人物に焦点を当て、この活動に罪深い身体の芸術的昇華を読み解いている。第 4 章ではクリミア戦争でロシア将軍を背後から狙撃した人物を取り上げ、この事件が隠ぺいする衝動、排せつ物への執着や同性愛を明らかにした。第 5 章では *Finnegans Wake* 結末部の ALP による独白が分析される。夫である HCE の罪を浄化する役を演じる ALP はみずからをどぶ川のイメージで表象し、現実では不可能な排せつ物=罪の浄化を夢想すると読み解いた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の独創性はつぎの 2 点にまとめられる。ひとつに、James Joyce の著作キャリアを通して、排せつ物のイメージの使用法を調査し、中期までと後期とでは使用法に顕著な変化がみられることを明らかにしたことである。2 点目として、Joyce 最晩年の大作である *Finnegans Wake* に見られる排せつ物イメージを網羅的に分析することで、1930 年代におけるダブリン社会の抑圧とそこからの解放という小説全体のモチーフを浮き彫りにしたことが挙げられる。以上の点は、これまでの Joyce 研究においてじゅうぶんに検証されていない独創的な仮説であり、それを本論文の使用言語である英語で国際的に示したことの意義は大きい。本論文は MLA 書式の英文で書かれ、本論部分 145 ページ、附録等含めた総ページ数は 167 ページ、総ワード数は 37,966 ワーズに及ぶ。

さらに個別具体的な分析において、百文字語と呼ばれる Joyce 特有で難解なことば遊びを丁寧に読み解き、5 回登場する百文字語の相互補完性を明らかにする一方、百文字語がこの小説のナラティヴにおいて果たす機能（具体的には読む速度を緩める機能）を指摘した点も高く評価できよう。

他方、“bodily thinking”や “materiality of writing”など真新しい言辞を駆使して、Joyce のナラトロジーを説明しようとするものの、これらの概念規定が不十分なため、十分な説得力をもつに至らなかつたことは残念である。英語の表現にもやや洗練に欠けているところがあり、本論文の主張がじゅうぶんに伝わらないという欠点もわずかながら見られた。とはいっても、こうした欠点はあるとしても、論文の主旨は明確であり、先に述べた本論文の独創性が損なわれることはない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。